MEIJI UNIVERSITY

二〇一三年度 明治大学人文科学研究所主催〔公開文化講座 横浜〕

開港横浜の歴史と文化

11月30日〔土〕2013年

13：00〜17：00〔開場12：30〕

神奈川県立歴史博物館 地下1階講堂
神奈川県横浜市中区南仲通5-60 TEL045-201-0926

プログラム

幕末維新の政局と開港地横浜
落合 弘樹〔明治大学文学部教授〕

三井物産会社明治14年度新入社員、「条どん」の見た横浜、上海
—のちの物産常務、満鉄総裁、政友会議員山本条太郎と日本近代の貿易システム—
若林 幸男〔明治大学商学部教授〕

「横浜浮世絵」の位置
桑山 童奈〔神奈川県立歴史博物館 主任学芸員〕

開港横浜の風景 —大仏次郎「幻燈」評注—
佐藤 義雄〔明治大学文学部教授〕

事前申込 不要

定員 70名

共　催：神奈川県立歴史博物館
後　援：明治大学神奈川県東部地区父母会

お問い合わせ　明治大学人文科学研究所　TEL03−3296−4362　http://www.meiji.ac.jp/jinbun/

横浜 学外講演会の開催にあたって

ガス燈のあかりのもと、開港横浜には近代の様々な文化や風俗が誕生しました。明治大学人文科学研究所は、横浜開港の歴史的意味とともに、その状況下での豊穣な文化の展開を、神奈川県立歴史博物館と共に掘り下げます。

幕末維新の政局と開港地横浜

明治大学文学部教授　落合 弘樹

周知の通り、横浜は日米通商条約調印後に開港地として築かれた都市である。従来の対外的窓口であった長崎に加え、国際都市として急速に発展していく。ただし、朝鮮・琉球とのみ外交関係を継続し、清国とオランダとのみ通商を行うという「鎖国」体制の崩壊は、さまざまなインパクトをおよぼした。通商条約を締結し横浜開港に踏み切った徳川公儀（幕府）と、攘夷を叡慮とし政治に介入した禁裏（朝廷）との間のねじれは、安政の大獄、桜田門外の変にみるように政局を混乱に陥れた。そうしたなかでも横浜は居留地を基軸に着実に発展していく。政治の中枢が江戸から京都に移動したのちも、生麦事件や横浜鎖港問題など重要問題の舞台となった。王政復古、さらには鳥羽伏見の戦いののち、東征軍と旧幕府は和戦両用の構えで向き合うが、江戸無血開城の背後には、国際貿易港横浜の保全をめぐる駆け引きがあった。本報告は上記の過程について政治史的に論じていく。

略　　歴
1962年大阪府生まれ。中央大学大学院文学研究科修了。京都大学人文科学研究所助手を経て現職。

主要著書
『西南戦争と西郷隆盛』（2013年、吉川弘文館）ほか。

三井物産会社明治14年度新入社員、「条どん」の見た横浜、上海
ーのちの物産常務、満鉄総裁、政友会議員山本条太郎と日本近代の貿易システムー

明治大学商学部教授　若林 幸男

皆さまよく御存じの通り戦前期における横浜は生糸の輸出を主に展開した港でした。そこでは中居屋重兵衛などの売り込み商が活躍し、外国の商人に対して生糸や蚕種を販売していました。これは大量の資金を生糸業者に貸し付けて、生産農家から集荷する方式で、一面大変冒険投機的なビジネスでありました。粗製乱造問題がすぐに起こり、政府もいろいろ対処策を施していったことは非常に有名な話です。こういったビジネスに対して、日本製の生糸を自ら輸出先まで運び、そこで売り払う方式が直輸出という貿易システムです。初期の三井物産は主にこの仕事をしておりました。有名なのは富岡製糸所で作った糸をパリ支店で販売するといった、官業に近い位置での直輸出型のものでした。
わたくしの専門はこの三井物産、そのなかでもどのように総合商社のビジネスは作られたか、とくにその人的資源はどのように陶冶されたのか、という点に興味があります。ここでは物産の横浜支店の日常、山本条太郎など同支店に丁稚奉公で入社し、後に代議士にまで上り詰めた人物の修行時代をいくつかのエピソードで振り返ることで当時の横浜のイメージにボリュームを加えてみたいと思います。

略　　歴
1957年東京生まれ。明治大学大学院商学研究科博士後期課程修了、1989年商学博士、その後明治大学商学部講師、助教授を経て2005年より現職。

主要著書
『三井物産人事政策史1876～1931年』（ミネルヴァ書房、2007年）など

「横浜浮世絵」の位置

神奈川県立歴史博物館 主任学芸員　桑山 童奈（どな）

横浜浮世絵とは安政６年（1859）６月の横浜開港の翌年から明治５年（1872）の東京横浜間の鉄道開業の頃までを中心に出版された、新しく造られた横浜の町、日本にやってきた外国人の姿や洋風建築に暮らす彼らの生活などを題材とした浮世絵のことを指し、約800点を計上するのが一般的である。時期的に、今も名前を知られる浮世絵師たちは描いていないため、あまり知られていないと思われる。現在、異国情緒を漂わせたこれらの作例は横浜が時代の先端であった時代を確認できる資料として位置づけられることも多いが、当時の浮世絵出版界の中ではどのように位置づけるべきであろうか。従来の人気ジャンルである歌舞伎絵や美人画、さらに幕末の不安定な政情を反映するような浮世絵群のなかで、あらたな注目スポット横浜へのまなざしがいかなるものであったか、出版数との比較や描かれた事物のニュース性などを検討することにより考察してみたい。

略　　歴
1969年東京生まれ。慶応義塾大学文学研究科博士課程満期退学、神奈川県立歴史博物館学芸員。

主要著書
共著『謎解き浮世絵叢書　小林清親東京名所図』（二玄社、2012年）

開港横浜の風景　―大仏次郎「幻燈」評注―

明治大学文学部教授　佐藤 義雄

横浜英町生まれの「鞍馬天狗」の作者は、大好きだったらしい横浜居留地をよく調べ、近代の形成に思いを馳せつつ、開化の横浜の風俗を描き続けた。その中で最も秀逸な「幻燈」をテキストとして、「南京街」「英字新聞」「新興貿易商人の生活と趣味」「居留地の性風俗」「旧佐幕派士族の動向とエートス」など、描き出された開港横浜の風景を、「注」を打ちつつ眺望してみたい。開化の横浜には東京以上に近代日本が抱えた諸問題が一点に集約されている、「幻燈」は、そういう思いを抱かせるテキストである。

略　　歴
1948年生まれ。東京教育大学大学院修了。京都教育大学助教授を経て、明治大学文学部教授・人文科学研究所長。

主要著書
『文学の風景　都市の風景』（2010年、蒼丘書林）、『都市空間を歩く―近代日本文学と東京』（2005年、明治大学リバティアカデミー）、同第2輯（2008年）、『近代への架橋』（2007年、蒼丘書林）など